

機械的に自動チェックしている項目

- epubcheckでチェック
- サロゲートペアの文字が含まれていないか
- Unicode IVSの文字が含まれていないか
- 日本語フォントにグリフがないスペース文字が使われていないか
- 分離した濁点半濁点文字がないか（OS XのUnicode正規化対策）
- （SVGラッピングのページで）画像の実際のピクセル数とSVG側のピクセル数に違いが見られないか

Unicodeのスペース文字はたくさんある

- U+0020 SPACE (半角スペース)
- U+00A0 NO BREAK SPACE
- U+2000 EN QUAD
- U+2001 EM QUAD
- U+2002 EN SPACE
- U+2003 EM SPACE
- U+2004 THREE-PER-EM SPACE
- U+2005 FOUR-PER-EM SPACE
- U+2006 SIX-PER-EM SPACE
- U+2007 FIGURE SPACE
- U+2008 PUNCTUATION SPACE
- U+2009 THIN SPACE
- U+200A HAIR SPACE
- U+200B ZERO WIDTH SPACE
- U+200C ZERO WIDTH NON-JOINER
- U+200D ZERO WIDTH JOINER
- U+300A IDEOGRAPHIC SPACE (全角スペース)

※赤は日本語フォントに字形がない文字

これを目視でチェックするのは無理。機械的なチェックが必要になる。

ワークフローでの品質保持の工夫

①テキスト関係

- InDesignからXML経由で書き出すフローを取ることで、ルビの脱落を防いでいる（コピー&ペーストだと消える）。
- InDesign内で実際のドキュメントを書き換えて整えていくため、文字修飾情報、レイアウト情報の脱落が起きにくい。
- EPUB内に混入するとトラブルになる制御文字類などは、InDesignからのデータ書き出しと合わせて自動置換／除去を行っている。

ワークフローでの品質保持の工夫

②画像関係

- EPUBに挿入する画像は、InDesignから書き出したPDFを元に作成する。これによりInDesign内でのトリミングなどの画像編集情報が落ちないようにしている。
- 画像作成の処理はPhotoshopでスクリプトを利用して行う。ピクセル数の計算を機械的に処理するため間違いが起きにくい。
- 画像タグへの代替文字やサイズ指定の記入などは、別に用意したCSVの表をもとに一括マージ処理を行う。

ワークフローでの品質保持の工夫

③目次・索引・注リンク

- 目次はEPUBオーサリング時に本文内の見出し項目を抽出して自動生成している。このためリンク処理のミスが起きない。
- 索引はまず本文XHTML内に索引用のタグを挿入し、その後プログラム処理で一括生成する形を取っている。
- 注リンクはオーサリング時に補完処理を行う（リンク先／元のIDが入っているのを前提にリンク先ファイル名を自動補完する）。

ワークフローでの品質保持の工夫

④EPUB内OPF記述データ

- OPF内に記述する必要があるマニフェストの値は、指定した元フォルダ内のファイル情報を元に専用オーサリングアプリで自動生成する。このためヒューマンエラーが起きない。
- OPF内Spine情報も自動で生成する。Spineの並び順で指定するコンテンツ表示順はオーサリング時にGUIで指定する形。
- 書誌情報等はオーサリングアプリに入力し、値が間違っていないか最低限のチェックをアプリが行う（カナ必須項目に漢字が入っていたらハネるetc）。

内部目視校正で主に見るもの

- 画像がブロックごと欠落していないか
- テキストがブロックごと欠落していないか
- 抜けているページがないか
- 表示順は大丈夫か
- （縦書き本で）縦中横になるはずの文字が寝てしまっていないか
- その他太字、圏点、斜体などの付加情報の欠落がないか

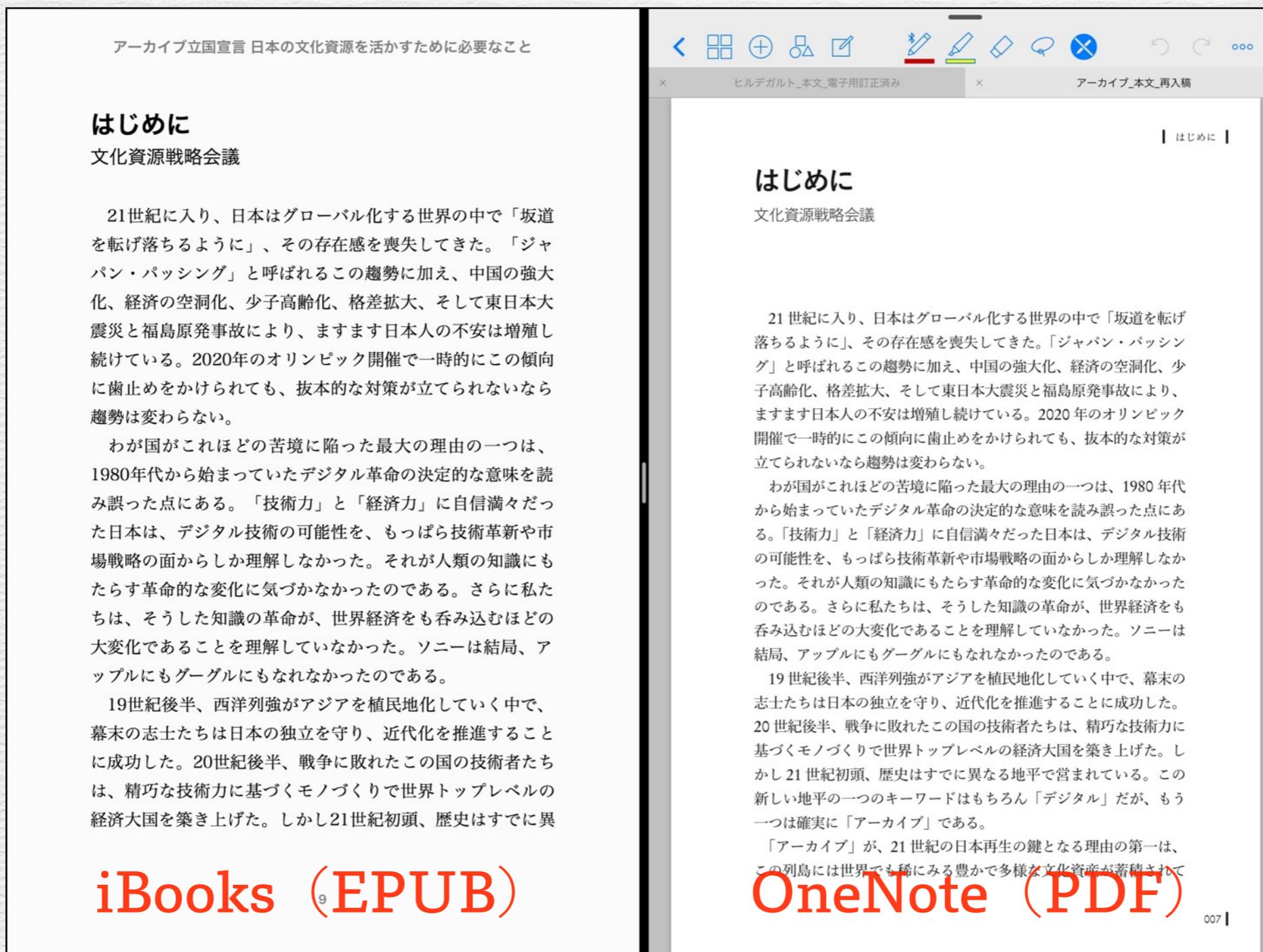
目視校正で見ないもの

- 全てのビューアでチェックすることは現実的にできないのでビューアを換えての表示チェックはしない。別途チェックファイルで表示チェックを行い、十分な表示ができないビューアが確認された項目についてはできるだけ使わないように。
- 現状EPUBではツメ処理など組版再現は紙に比べれば不十分だが、コンテンツ側で対処できないため、そこは見ない。
- 漢字の細かな字形差も目視では見ない。

内部校正の具体的な方法

- 制作途中での簡易的なチェックはXHTMLファイルをそのままブラウザ（Safari/Chrome）で見ることで行っている。
- 突き合わせ校正用機材としてiPadを使っている。できるだけ底本の版面に近い（字送り等）状態を作り、絵として左右を見比べる形でチェックする。
- 確認作業者はチェックに使ったビューア内で間違っていた箇所をアプリのマーカー機能でチェックを入れ、iPadごと制作者に渡して修正してもらおう。マーク箇所が一覧できるので便利。iPadの表示アプリとしてはiBooksやKinoppyを使う。

iPad ProのSplit Overモードでの引き合わせ校正



マーカーは一覧表示できる

